査で出土した遺物（考古遺物）を取り扱うことが多いのですが、実習生のほとんどが考古学専攻ではないために、はじめて考古遺物を取り扱う実習生も多く見られました。

「建築史概説」では、実習生の全員が建築学とはまったく関連のない学部に所属していることから、まず飛鳥時代における伽藍配置の推移を説明し、山田寺金堂復原模型を用いて飛鳥時代建築における細部の様式および特徴、部材の名称、奈良時代建築との違いなど簡単に講義しました。これをもとにして、演習では建物がどのように組み上がっているのかを自分の目で確かめてもらうために、復原された山田寺東回廊の展示部分のスケッチをおこないました。このような経験は大学ではほとんどないらしく、てこずる実習生もいました。

今年度の博物館実習が実習生にとって有益なものとなったかは現段階ではわかりません。しかし、少なくとも飛鳥時代に興味をもってもらうことはできたように思います。実習生の受け入れは、来年度も引き続きおこなわれます。はたして、次回は実習生が何人来るのでしょうか。（飛鳥資料館）

研究会の開催

古代瓦研究会第５回シンポジウム

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、日本最古の寺院である飛鳥寺（588年創建）の瓦を皮切りに、古代の瓦を製作技法の面から見直そうという試みをつづけています。1998年以降、それに関わる４回のシンポジウムを奈文研で開催しましたが、６月23・24日の両日には、会場をはじめて千葉大学に移し、山田寺式軒瓦の東国への展開をテーマに、研究報告と討議をおこないました。

会場には、各地の寺院出土瓦を持ち寄っていただき、実物を前にして活発な意見が交わされました。こうした積み重ねにより、従来、文様に偏りがちであった瓦研究に、新たな局面を切り開くことを期待しています。あわせて、開催にあたりご協力いただいた関係者・関係機関にあつく御礼申し上げます。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

シンポジウム会場全景

研究室紹介

歴史研究室（文化遺産研究部）

奈文研発足当初に、南都諸寺社の文献史料部門、考古部門の調査研究を目的に設置された歴史研究室は、考古部門が1964年に分離して以降、定員１名と併任数名の体制で、南都の諸大寺や大社が所蔵する書跡資料の調査、研究を継続してきました。

そしてこのたび、奈文研の独立行政法人化に伴い、新しく設置された文化遺産研究部の１研究室（定員２名）となり、建造物研究室、遺跡研究室とともに、文化遺産についての総合的な調査研究をおこなうこととなりました。

世界遺産条約の文化遺産の定義には、書跡資料の類は含まれていませんが、我が国には、世界でも稀に古くからの書跡資料が数多く遺存しています。そこに、文化的知的財産としての文化遺産を、よりトータルにとらえる調査研究体制ができたことは大きな意義があるのではないでしょうか。

歴史研究室は、歴史資料を主たる調査研究対象としておりますが、そのなかでも文字が書かれている資料を中心に、従来から継続的に調査してきました。南都、すなわち奈良には、東大寺をはじめ数多くの古くからの大寺があります。そこに所蔵されている

北浦定政関係資料（大和国坪割細見図 天理市北部付近）

古文書、古記録、経巻、聖教などの書跡資料の量は厖大なものです。歴史研究室では、それらの書跡資料について、現在寺院が所蔵されています現状をふまえて、整理し、番号を付け、ラベルを貼り、調書をとり、写真撮影する調査を行っています。そして、作成してきたちょう調書や、写真の焼き付けを使って、その成果として管理にも研究にも役立つ目録を作ったり、資料紹介を行ったりしています。調書の内容を、データベース化する情報処理の作業も行っています。

調査方法は同じでも、調査をしている寺院は数多くあり、それぞれの寺院について、抱えている課題は違います。たとえば、興福寺では活字本の目録の第3冊目刊行、薬師寺では入力しているデータベースの整備公開、東大寺では国宝にまだ指定されていない文書の整理などが、現在取り組んでいる課題です。調査は、南都以外にも、依頼を受けて京都、滋賀などに出かけることもあります。

研究テーマとしては、資料に即した研究を目指して、室員が古文書の用紙の問題や、平城京や寺院の絵図についての研究などをおこなっています。

また奈文研には、1992年に子孫の方から、幕末の都城陵墓の研究者である北浦定政関係の資料が寄贈されました。定政は、平城京条坊復元図を最初に作り上げた人ですが、彼が条里や条坊を実地に踏査したときの調査日誌（野帳）や復元図などが含まれており、それら貴重な資料を紹介する予定です。

文化遺産そのものが、その本来的な場所として存在している奈良におかれた研究室としての認識をもとに、文化遺産の内実としての歴史資料の調査、実態把握と成果公表に今後つとめていきたいと考えています。

考古第二調査室（平城宮跡発掘調査部）

考古第二調査室は調査員4名からなり、洗浄、収蔵、復元を担当する整理作業員5名、実測図の作成やデータベース管理を担う派遣職員4名がこれを支援しています。ここでは発掘調査で出土した土器、土製品の整理、研究をおこなっています。平城宮跡の膨大な出土品は、古代の土器研究の最も基準となる資料です。

発掘現場から持ち帰られた土器・土製品は丁寧に洗われ、接合を検討します。そして、調査次数・出土地点・出土年月日などのデータを書き込み、図面を作成します。人々の生活に密着した食器であり、商品でもあった土器の出土地点や帰属時期を調べ、その生産と消費のあり方を解明することで、奈良時代の歴史をひも解いていきます。

一般の人々にむけたプレゼンテーションとして、復元も欠かせない作業です。復元された土器は標本や展示資料として使われます。また、文字や絵の書かれた墨書土器や施釉陶器といった注目すべき遺物について、現在データベース化を進めています。

このほか、国際遺跡研究室の唐三彩に関するプロジェクトにも協力しており、古代における施釉陶器についての調査・研究をすすめています。

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています
PRINTED WITH SOY INK